

# 新島襄の聖書研究仲間 杉田廉卿について

樋 口 雄 彦

幕末、江戸で洋学を学んだ新島襄が、何名かの仲間と聖書の研究に取り組んだこと、仲間の一人でそのきっかけをつくったのが杉田廉卿という人物であったことは、『新島襄全集』に収録された書簡の注で説明がなされるなど、廉卿の素性や二人の交友関係も含めすでに明らかにされている。

廉卿が「いちはやくキリスト教に帰依した<sup>①</sup>」とまで断定できるのかどうか、幕府の「お膝元」で果たして彼らが当時国禁とされたキリスト教の真髄にどこまで接近し得たのか否か、疑問がないわけではない。しかし、同じグループに加わっていた津田仙の回想が真実であるならば、彼らの好奇心は余程のものであったことになる。また、新島がアメリカから父や弟に出した手紙で、病気の時には神仏への願掛けやまじないはせず廉卿に相談せよ<sup>②</sup>、聖書を読むよう勧める内容の手紙については廉卿ら以外には見せてはならない<sup>③</sup>などと記している点から、二人が秘密を共有し、同じ考え方を抱いていたらしいことは十分にわかる。

本稿では、新島とキリスト教との出会いの場面で少なからぬ役割を果たしたといえる杉田廉卿について、これまで幕末維新期の幕臣や静岡県の地域史を調べ続けてきた筆者の立場から、若干の新知見を加えてみたい。若き日の新島の人的ネットワークを明らかにする上で、わずかなりとも貢献できれば幸いである。

## 新島と杉田

まずは、聖書研究グループについて述べた津田仙の証言をそのまま引用しておこう。<sup>(4)</sup>

「友人に杉田廉卿なる人あり、氏は名家杉田鶴齋の遺跡を継げる人にて盛卿の養子なり。当時廉卿は翻訳方にて福地源一郎及び余など、務向の同じかりしま、至つて親しかりき。廉卿は英書と蘭書を解し、が、元來宗教心ふかき人として、解剖学など究めゆくに従ひ遂に神を認め、而して之を奉ずるには、基督教ならざる可らずと信ずるに至りぬ。新島襄氏即ちそのころの七五三太君に斯教をすゝめしもこの廉卿なり。かくて廉卿は漢籍に通ずる吉田賢甫らと共に、英訳、漢訳の教書を調べ、まことに神こそ天地の主宰なれと主張しぬ。此人は沼津にて肺病の為斃れしが、余は此人の勧告にて基督教のよきことを知りぬ」<sup>(5)</sup>。

「氏は始め吉田賢甫、杉田廉卿と共に聖書を研究した、始めは蘭文の聖書を読んで居つたが何分解しにくいと見え、後には吉田氏の漢文に長けたるを幸ひ、漢訳の聖書に就て学んだやうであつた」<sup>(6)</sup>。

津田の回想からは時期が判然としない。新島の年譜<sup>(7)</sup>では、この聖書研究グループの活動を文久3年(1863)の項に含めているが、以下に掲げる廉卿の履歴書によれば、彼が小浜藩医から外国奉行手付翻訳御用御雇に抜擢されたのは、元治元年(1864)4月14日のことであり、1年後と考えたいところである。しかし、新島はその元治元年3月には江戸を離れ箱館へ向かっているので、矛盾が生じる。廉卿が外国方に採用された時、もう新島は江戸にいなかつたのである。もっとも、外国方に勤務する以前から廉卿がグループに加わっていた可能性も否定できないので、これ以上の詮索はやめておきたい。

生国駿河 三代目 杉田廉卿〔廉〕

一私儀水野出羽守様御医師武田簡吾弟二而〔て〕 忠義様御代安政六己未年四月三日養父成卿存生中奉願置候  
通養子江被仰付候

一同年五月廿五日養父成卿へ被下置候知行高之内為跡式百四拾石被下置候

一同年十二月十九日 栄寿院様御病中度々伺罷出候ニ付御酒吸物被下置候

一同御代文久二壬戌年四月十七日明日ヨリ〔より〕御屋敷詰可仕旨被仰付候

一当御代文久三癸亥年五月十三日当秋御初入之節御供被仰付置候処同年六月御上坂被為仰蒙〔蒙仰〕候ニ付直

ニ右御供可相勤旨被仰談同九日御供ニ而出立仕候処見付駅ヨリ〔より〕御引返被遊候ニ付同廿三日帰府仕候

一同年七月二日奥医師御手薄ニ付上々様方御平脉拝診被仰付此後時々取御療用可仰付候間奥医中申合可相勤旨  
被仰付候

一同御代元治元甲子年正月十一日恭丸様御出生之節度々伺罷出候ニ付御酒吸物被下置候

一同年四月十四日外国御奉行様御手附翻譯御用御雇被仰付御扶持方式拾人扶持御手当金拾五両被下置候旨御老

中井上河内守様ヨリ〔より〕御達有之趣被仰付候

右之通御坐〔座〕候尤嘉永三庚戌年五月以前之儀ハ先御代書上置申候〔以上〕

〔当子二拾歳〕

元治元甲子年五月

杉田廉卿印

柴山源十郎殿<sup>(8)</sup>

安政6年（1859）、17歳の新島が入門した蘭学の師は杉田玄端だったらしいが、<sup>(9)</sup>実際の手ほどきは玄端

の甥にあたる廉卿がしたのではないかという推測もある<sup>(10)</sup>。しかし、この年、廉卿は杉田家の養子に入ったばかりで、年齢もまだ15歳であり、年上の新島を教えたであろうか。

ところで、津田仙は、慶応2年（1866）頃、廉卿に勧められたオランダの本を読み、酒の害について自覚し、後年それを『青年健康学』（明治28年）として翻訳・刊行した。クリスチャンとなり禁酒運動を推進した津田にとって、幕末に出会った廉卿の存在は大きかったという<sup>(11)</sup>。

津田にとつてだけでなく、新島にとつても廉卿は大きな影響を与えた人物であり、ごく親しい友人だったことは間違いない。そのことは、在米中の新島が杉田に写真を送ったり、逆に日本の草花の種を送付するよう依頼したり、杉田の病状を心配するようすなど、『全集』収録の書簡から読み取れる。

以下に掲げる史料は、ごく短いものではあるが、新島と廉卿との親密さを示す、これまで紹介されたことのないものである。明治4年（1871）アメリカ経由でイギリスへ留学した静岡藩士曾谷言成という人物の日記である。静岡から上京した曾谷は、出発を前に同じ静岡藩士（旧幕臣）の英学者乙骨太郎乙の訪問を受け、饞別の一席として「両国橋東之酒楼」で酒を飲んだという、3年（1870）12月29日付の記載に続く箇所<sup>(12)</sup>に記されているものである。

米国マスサキエセツツニテ

同 アンヂユー 新島七五三

邦 吉田尺乙骨三氏健在

各邦

杉田廉敬死亡之由ヲ通呉レ候様乙骨氏より被託<sup>(13)</sup>

これは、アメリカに着いたら、同地にいる新島に、日本の吉田賢輔・尺振八・乙骨太郎乙らが健在でいるこ

と、杉田廉卿（廉敬となっている）が死去した旨を知らせてやってほしいと、乙骨から託されたということである。ただし、曾谷がアメリカで新島に会えたかどうかは、日記の後の部分には記述がなく、わからない。明治5年（1872）には岩倉使節団の一等書記官として渡米した田辺太一（元静岡藩士・沼津兵学校教授）に会い、共通の知人であった吉田・尺らの消息を聞いているので、その時にも、田辺が沼津にいたこともあつて廉卿の死について聞かされた可能性がある。

杉田廉卿が沼津で死んだのは、明治3年2月20日のことである。<sup>(14)</sup>

なぜ廉卿が沼津にいたのか、維新時の彼の動向を整理しておこう。小浜藩士としての身分のまま、幕府の外方にも勤務していた彼は、親族や友人にも幕臣が多く、戊辰戦争に際しては旧幕府方に加担している。具体的には、遊撃隊を率いて箱根で新政府軍と戦い敗れ、負傷した伊庭八郎を匿い、箱館へ再脱走させるにあたって、乙骨太郎乙（華陽）や尺振八とともに尽力したのである。以下に引用するのが、そのことが記された文献である。

乙骨華陽が今川小路なる杉田廉卿氏（成卿先生の嗣にて玄端先生の姪なり後沼津に歿す）に寓居せると聞き往いて脱艦以後の顛末を語り且如何して横浜に赴き函館に至るべしやと其定見を問ひけるに廉卿氏熟考して方今横はまに知る人少からずといへども此の大事を托すべきは独尺氏のみ行いて共に凶らば事正に成るべしといふ<sup>(15)</sup>

今川小路は、現在の東京神田神保町である。同じ慶応4年（1868）には、福沢諭吉が小川町（今川小路と同じ）の杉田廉卿宅を訪れ、曾祖父にあたる杉田玄白の遺稿「蘭学事始」の出版を勧めており、その結果、同書は翌明治2年正月に刊行されることとなった。<sup>(16)</sup>

旧幕臣たちは、明治新政府から70万石を与えられた主家徳川家に従い駿河（静岡）へ移住する者と、新政府に仕える者、帰農・帰商する者とに分かれた。新島・廉卿の聖書研究仲間のうち、吉田賢輔は徳川宗家の家臣から離脱し一橋徳川家（一橋藩）の家臣へと身分変更をして東京に残った。<sup>(17)</sup>津田仙もやはり徳川家臣の籍を離れ、築地ホテル館に勤務した。幕府に外向していたものの本来は小浜藩酒井家の家臣であった廉卿は、明治元年暮れには藩主に従い若狭国小浜に行っており、翌年正月から3月にかけては京都に滞在していたことがわかつて<sup>(18)</sup>いる。

襄にあてた明治2年（1869）7月26日付の新島双六書簡は、杉田玄端が重病の廉卿を沼津へ連れて行った旨を伝えている。<sup>(19)</sup>旧幕臣で静岡藩士となっていた玄端は、当時藩立の沼津病院頭取（院長）の任にあつたが、劳咳で苦しんでいる甥を気候の良い沼津で看病するとともに、平癒の後は病院を手伝わせるつもりだった。<sup>(20)</sup>廉卿は小浜・京都から東京へ戻っていて、酒井家の了解を得てから沼津へ移ったらしい。

廉卿の墓は沼津の長谷寺に建立された。<sup>(21)</sup>現在も同寺には、「S」の1字を彫ったキノコ型の墓石が残るが、それがそうだと思われる。

## 兄武田簡吾の獄死

実は廉卿にとって沼津は単なる転地療養先ではなく、故郷であった。先に掲載した履歴書の冒頭に、「水野出羽守様御医師武田簡吾弟」と記されていたことからわかるように、彼は沼津藩（水野家・5万石）に仕えた医師武田簡吾の実弟だったからである。<sup>(22)</sup>

地図史上からもよく知られた事実なので、ここでは詳述しないが、杉田廉卿の兄武田簡吾は、メルカトル図法によるイギリス製世界地図を翻訳し、『輿地航海図』（安政5年）と題し刊行した人物である。同図の校閲者は杉田玄端であり、簡吾は玄端の門人だったようだ。廉卿が杉田本家の養子として迎えられた背景には、その師弟関係があつたことになる。

しかし、武田簡吾は不幸な人だった。『輿地航海図』の原図は、駿河湾に沈没したロシアの軍艦ディアナ号から漂着したものであり、それを私的に入手し、正式な手続きを踏まないまま翻訳・出版したことが幕府や沼津藩に咎められ、処罰され、最後は獄死したのである。このことは、『輿地航海図』を増訂し、明治5年（1872）に刊行された『増訂輿地航海全図』の序文を撰文した岡千仞が書き残した草稿「航海地図跋」の以下の記述から明らかである。

沼津医生武田簡吾獲航海地図于一漁夫手大悦簡吾涉洋字乃與同志繙訳上梓。既而維吏議。是時海禁禁嚴簡吾以是下獄瘦死凶廢不行<sup>(23)</sup>

また、当時の一次史料ともいえるべき、『輿地航海図』に序文を寄せた沼津藩士2名の履歴書には、安政6年「五月七日御目見医師並武田簡吾翻譯之輿地航海図」に開板前の伺いもないまま序文に名前を載せたことは、「元図者出所不正之品」であるという点からも「不束」であり、「差控」を命じるといった記載があり、それが実際に起きた事件だったことが裏付けられる。<sup>(24)</sup>

また、後年の新聞記事には、この事件について、「翻訳者は土地を放逐せられてしまつた<sup>(25)</sup>」と記したものがあることから、簡吾は投獄されただけでなく、沼津から追放されたと受け取ることもできる。

あるいは、放逐されたのは簡吾のみならず、武田一家だったと理解すべきであろう。それは、簡吾・廉卿兄

弟の父武田悌道（旧名悌斎、寛吾とも？）が書き残した文書からうかがい知ることができる。「先年出羽守殿へ勤中悌寛吾不調法相働き御扶持召上小生迄も御咎被申付」と記された、慶応元年（1865）3月12日付の沼津宿の豪商鹿島屋（井上甚太郎）あて悌道書簡である。息子が扶持を召し上げられたばかりか、自分も咎を受けたというのである。罪状までは明記されていないが、簡吾（寛吾）による『輿地航海図』の無断刊行であったことは間違いない。また、同じ書簡からは、沼津を退去させられた武田家に、その後も、簡吾の死、妻子の離散といった悲劇が続いたことが記されている。なお、慶応元年当時、悌道は幕府の「神奈川奉行付御医師」に雇用されていた。<sup>(26)</sup>

序文を寄せた2名の沼津藩士が処罰されたのが安政6年5月。悌道・簡吾父子に対する処罰もほぼ同じ頃だったと考えられる。廉卿が杉田成卿の養子となったのは同じ年の4月である。事件の真っ最中だった可能性がある。あるいは武田家の沼津追放、一家離散の結果、廉卿は杉田家に拾われた形になったのかもしれない。

簡吾がいつどこで死んだのかははっきりしない。獄死したのが真実であれば、藩地である沼津であろう。その後、父悌道は横浜に落ち着き、幸運にも幕府に仕える身となった。横浜では、ドイツ人商人エドワード・スネルが、『輿地航海図』を翻刻し、文久2年（1862）2月、『万国航海図』と改題し刊行している。横浜へ移住した悌道は、息子の遺作となった地図の版木を所持しており、それを印刷・販売する権利をスネルに譲渡するといった、何らかの関与をしたのではないかと想像される。<sup>(27)</sup>

横浜での武田悌道の動向については、駿河国富士郡大宮町（現富士宮市）の素封家角田桜岳の日記から、文久4年（1864）のわずかな期間であるが、以下のような記事を拾い出すことができる。

5月3日横浜にて「早朝武田悌道来、セメンズ方へ行長話し帰」



5月4日「朝武田へ行、並木某来、定番役取締之由、酒を飲」

6月14日「夕方横浜武田悌道門人吾津田真一郎へ遣候阿蘭陀へ之書状賃ドロ三枚ト云事書面にて申越候、いつれ近日帰国浜へ参り」

6月26日「今朝中浜万次郎来ル、早朝武田悌道より和蘭行状賃申来ル（中略）武田行書状認」

6月27日「一金壺両三方也 武田悌道老へ封遣ス 右ハ和蘭陀本国ニ罷在候津田真一郎へ出候書状、和蘭ミニストルへ申込候ニ、トル拾枚と申候処、橋本と云通詞へ頼、同人よりドル銀三枚にてと、くれ候よし先日より両度申来ル」

これらの記述からは、悌道が、郷里駿河の人々との交際を続けていたことがわかるほか、角田の知人であり当時オランダ留学中の津田真道との文通の仲立ち役をつとめたことなどが見て取れる。

悌道は、慶応3年（1867）の広島藩の記録にも登場する。「横浜英字所開設ありしを以て原田志賀之輔曾根直之進原田光之丞竹内房吉中島小弥太松下房吉の六人は幕府へ出願して在神奈川武田悌道 神奈川役所医師 へ入塾せしめ該英字所へ通学する」とあるのがそれである。悌道は横浜で塾を開き門人を教えていたことになる。

ただし、明治維新後、悌道がどうなったのか、いつ亡くなったのかは全く不明である。徳川家の家臣、つまり静岡藩士として駿河・遠江に移住した形跡も今のところ見出せない。かつて追われた郷里沼津へ戻り、息子杉田廉卿と会う機会があったであろうか。勝海舟の「日記」九号（明治3年10月25日〜4年正月15日）の表紙裏にある書き込みに、「横浜元弁天内 竹田悌道娘<sup>30</sup>」と記されているのは、何を意味しているのだろうか。海舟日記の本文には関連記事はないようであり、謎である。

## 武田家の素性

話が前後するが、そもそも武田家とは、どのような家だったのだろうか。

簡吾・廉卿兄弟の父武田悌道は、天保7年（1836）7月12日付で駿河国駿東郡獅子浜村名主あてに流行病薬代の領収証を残しているが、<sup>(31)</sup>それには「沼津不二見町 武田悌斎「印」とある。不二見町というのは、沼津藩士が住んだ武家屋敷地ではなく、町人が住む沼津宿の一面であった。他に悌道の住所を沼津大門町と記した文書もあり、また『輿地航海図』には「駿陽沼津大門」云々という簡吾の印鑑が押されているが、やはり大門町も町人居住区域であった。

何種類が存在する各時期の沼津藩の分限帳には、武田姓の藩士は1軒あるものの、医師ではなく、悌道とは無関係である。これらのことを勘案すると、どうやら武田悌道は沼津藩士ではなく、町医者だったらしい。

彼は医者として沼津周辺の豪農・豪商たちのもとに幅広く出入りしていた。安政2年（1855）9月、植松与右衛門（駿河国駿東郡原宿）、坂直右衛門（沼津宿）、新居要右衛門（同前）、中村九左衛門（同前）、柳下源次郎（同郡上香貫村）、秋山次郎右衛門（伊豆国君沢郡重寺村）、由井斧五郎（駿河国庵原郡由比宿）、今井半太夫（伊豆国賀茂郡熱海村）ら、駿河・伊豆の素封家たち全17名が取り結んだ「議定書之事」という文書がある。<sup>(32)</sup>星谷おふさという女性が伊豆山入湯と偽り、武田悌道（悌斎）らとともに日光路・甲州街道を旅行してきたことが領主から咎められたという一件を受け、悌道が彼女を誘ったという不埒な行為がすべての原因だったとして、「是迄親類内へ相加」へて交際していたが、今後は診察はもちろん付き合いを停止することを定め

たものである。悌道が起こしたトラブルに関わる文書であるが、彼がこの地域の有力諸家に親しく出入りし、親類扱いを受けるほどの医者だったことがわかる。

息子の簡吾についても、駿河国の素封家が記録した日記類に父悌道とともに登場する。たとえば、庵原郡蒲原宿（現静岡市）の渡辺利左衛門家の日記や駿東郡原宿（現沼津市）の素封家植松与右衛門家の日記である。まずは蒲原宿渡辺家の日記の<sup>(33)</sup>記事は以下の通り。

嘉永4年正月9日「沼津宿以し武田悌斎老次右衛門之風邪ニ付居合診察ヲ請る右乳之凝ハ格別心配可致症ニハ無之悪敷腫物之類ニハ無之候へ共場所不宜敷取留而治療可加と被申丸薬煎薬付薬と与へらる」

嘉永4年10月7日「我先日自江戸帰り候節箱根ニ於手ヲツキ痛メタル打木追々痛ム候ニ付当宿武田悌斎老ニ小手療治ヲ受ル」

嘉永5年3月12日「新次郎一件ニ付沼津武田氏柳下兩人原へ来ル我宮之前へ行相談」

嘉永5年7月30日「柳下庄右衛門殿武田悌斎老兩人真次郎一件にて宮の前ニ来立入真次郎内借大金之由ニ而宮の前不承知也」

嘉永6年7月26日「夜四ツ時原菱屋次郎右衛門到着ス 沼津医者武田寛吾ヲ連来ル」

嘉永6年7月27日「武田氏センナ一味ヲ用ル」

次に原宿植松家の日記は<sup>(34)</sup>以下の通りである。

嘉永6年2月12日「於英他お多、召連沼津武田氏江種痘ニ参候」

嘉永6年4月21日「武田寛吾殿上毛之医者長崎辺迄遊歴之由案内」

嘉永6年6月4日「水野侯壺番手出陣（中略）武田氏ニも出張之由」

嘉永6年6月13日「武田寛吾殿より異国船一条」

嘉永7年2月9日「武田寛吾より下田表異国船一条書状写」

嘉永7年10月4日「武田悌斎老久々ニて被參、彼之新渡タゴリチーフ持參、是ハ堀達之介之生像也」

渡辺家日記からは、武田父子がともに同家に入入りし診療を行っていたこと、植松家日記からは、種痘を実施していたこと、植松家を訪れ黒船来航の情報を伝えたこと、伊豆の海岸警備のため出陣した沼津藩兵に加わったこと、幕府の通詞堀達之助が写ったダグレオタイプの写真を持参したことなどがわかる。とりわけ植松家に対しては洋学や対外情報に関する情報の伝達者になっていたようすがうかがえる。

植松家文書の中には、末尾に「庚戌三月 武田記」(嘉永3年のこと)と記された、種痘について解説した「牛痘瘡」なる書付も残されており、早い時期から地域で活動した蘭方医だったことが推測される。たぶん、そのような実績を買われ、簡吾は沼津藩士に取り立てられたのであろう。その時期は嘉永期をさかのぼることはないのではないだろうか。

以上、杉田廉卿について、その兄武田簡吾、父武田悌道のことにもまで幅を広げ、述べてきた。外国方時代、廉卿が篤い宗教心を抱き、キリスト教の信仰へと足を踏み入れたのが本当だとしたら、その背景には家庭をめぐる不幸なできごとがあったことを看過できないのではないか。世界地図という海外へのあこがれ(兄)が、やがてキリスト教への傾斜(弟)へと結び付いていったと考えれば、廉卿の人生に大きな影を落としたと思われる、『興地航海図』をめぐる事件は、彼を通じて新島へもつながっていたといえよう。

註

- (1) 『新島襄全集』10（1985年、同朋舎出版）、382頁。
- (2) 1867年3月29日民治宛、同志社編『新島襄の手紙』（2005年、岩波文庫）、51頁。
- (3) 1867年12月24日双六宛、同前、62頁。
- (4) 同じ引用は、『同志社百年史 通史編二』（1979年、同志社、33〜34頁）にもある。ただし同書では、福地源一郎（桜痴）を聖書研究グループの一人として解釈しているが、津田の回想を読む限り、彼を含めないほうがよいであろう。
- (5) 「津田仙氏の信仰経歴談」（『護教』第344号、明治31年2月26日）。
- (6) 宍峯生「津田仙氏と語る」（『護教』第697号、明治37年12月3日）。
- (7) 『新島襄全集』8（1992年、同朋舎出版）、16頁。
- (8) 国立公文書館所蔵「洋学先哲碑文」、北沢正誠・今村亮・松尾耕三編『蘭学者伝記資料』（1980年、青史社）所収。  
〔一〕内は「杉田玄白先生年譜」（早稲田大学図書館所蔵）に記載された同文のうちの異同箇所。なお、ほぼ同じ履歴書は、「杉田成卿略歴」（早稲田大学図書館所蔵、大槻如電写）にも記載されている。
- (9) 森中章光「新島先生と蘭学の師杉田玄端との関係」（『新島研究』第20号、1959年）。
- (10) 『新島襄全集』8、10頁。
- (11) 高崎宗司「津田仙評伝」（2008年、草風館）、28頁。ただし、津田が正式に洗礼を受けたのは、明治8年（1875）1月のことだった。都田豊三郎「津田仙—明治の基督者—」（1972年、私家版、2000年復刻、大空社、48頁）は、廉卿から受けたキリスト教の感化は、津田にとって「予備知識」程度のものであったとする。
- (12) 曾谷言成「英行日誌 一」（早稲田大学図書館所蔵・柳田文庫）。この記述については、拙著『静岡学問所』（2010年、静岡新聞社、87〜88頁）の中でも紹介しておいた。
- (13) 『新島襄全集』3、97〜98頁、756頁。
- (14) 石原明「杉田玄白の家系」（『日本医史学雑誌』第8巻第3・4号、1958年、62〜63頁）に、「50、廉卿 廉 武田 簡吾の弟 弘化二年生 安政六年四月三日（15） 養子明治三年二月二十日（26） 歿 廉隅院……」とある。
- (15) 中根淑「尺振八君の伊庭八郎を救ひたる始末」（新保碧次編『香亭遺文』、1916年、金港堂書籍株式会社）、828

頁。

- (16) 石河幹明『福沢諭吉伝』第一巻（1932年、慶応義塾、99～100頁）。
- (17) 吉田俊男編『吉田竹里・吉田太古遺文集』（1942年、私家版）、27頁。
- (18) 「杉田家と木下家」『京都医事衛生誌』第161号（明治40年8月）、31～32頁。この文献と事実については、木下實氏のご教示による。
- (19) 『新島襄全集』9（上）（1994年、同朋舎出版）、46頁。
- (20) 沼津市明治史料館保管・大野寛一関係資料・杉田盛「六十年回想記ヨリ拔萃」。同史料の翻刻は、樋口雄彦「杉田盛の六十年回想記」（『静岡県近代史研究』第31号、2006年）、113頁。
- (21) この墓のことは、「長谷寺墓碑ハ養父白玄ガ廉卿ノ遺言ニヨリ同地で存命中設ケシモノ」という記述からわかる（前掲「杉田盛の六十年回想記」、117頁）。なお、杉田白玄（明治7年没）とは玄端の養父（実父とする説もあり）のことであり、廉卿にとつての「養父」ではない。
- (22) 明治期にまとめられた杉田家の家譜には、「名廉、成卿ノ養子、長女ヲ妻トシ、家ヲ嗣ク、実ハ駿河沼津ノ医家武田悌道ノ子ナリ」と、実父とその出身地が明記されているものもある（「杉田家と木下家」『京都医事衛生誌』第159号、明治40年6月）。
- (23) 「蔵名山房集 附録四」（東京都立中央図書館所蔵・特別買上文庫2281123）所収。
- (24) 2名とは服部純（方従）・小林信近（如山）のこと。他に摸写を担当した栗原有功（与助）の履歴にも事件への関与が記載されている（鎌ヶ谷市立郷土資料館所蔵『藩鑑譜』）。このことは、『沼津市史 通史編 近世』（2006年、沼津市、454～456頁）でも分担執筆者である筆者が記述した。
- (25) 松子「沼津と水野家（三）」『駿豆新聞』明治45年5月3日。
- (26) この書簡については、樋口雄彦『『輿地航海図』の訳者武田簡吾について』（『沼津市博物館紀要』19、1995年、沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館）で紹介した。
- (27) 横浜でスネルが刊行したものを「海賊版」とみなす文献もある（三好唯義編『図説世界古地図コレクション』、1999年、河出書房新社、71頁、128頁）。

- (28) 『角田桜岳日記 四』(2007年、富士宮市教育委員会)、279頁、304頁、311頁、312頁。
- (29) 橋本素助・川合麟三編『芸藩志』第十一卷(1977年、文献出版)。
- (30) 『勝海舟全集19 (海舟日記Ⅱ)』(1973年、勁草書房)、277頁。
- (31) 沼津市明治史料館保管・獅子浜植松家文書E-31「覚」。
- (32) 沼津市原・植松家文書 近世D-1-1-84。
- (33) 蒲原町史編纂委員会編『蒲原町史 資料編 近世三』(1996年、蒲原町)、911頁、1003頁、1031頁、1039頁、1065頁。
- (34) 沼津市史編集委員会編『原宿植松家 日記・見聞雜記』(1995年、沼津市教育委員会)。
- (35) 沼津市原・植松家文書 近世文書D-1-1-22。